

ターニングポイント

清瀬ちこ

照り続けていた太陽が衰えつつ六甲山へ傾いていた。

学校から帰宅した私は、汗まみれになった自慢のセーラー服を脱ぎとって汗を拭いていた気がする。

その時、部屋に入って来た母が進学を断念するように云った。中高一貫の地元ではお嬢様校として名の知れた女子校へ通っていた私は、当時の親友と同じように付属の短大へ進むか、ずっと憧れていた大学、地元の有名大進学を実現させるため受験するのかと悩みだしたころだった。

中学受験に成功すると、初めて出逢う同級生たちのイキイキとした姿が眩しくて、彼女たちの自己主張の強さや華やいだ雰囲気は日々圧倒されつつ、しだいにその色に染まっていた私は、キラキラと輝き続けているこの生活が、いつまでも続くものではないということを、いきなり宣告されたように感じたのだった。

このころ読んだ本の中に、遠藤周作の沈黙があった。近所の本屋でタイトルを目にした途端、何かに導かれるように手にしていた。

読み始めてイライラした。何に対して苛立ったのだろう。お話の中で繰り広げられる日本政府の基督教弾圧に対して？どう考えても好きにはなれないキチジローに対して？

そもそも、この話はかつての日本が歩んだ歴史を垣間見ることができる話だ。そう思うと、どんどん読み進めてあっという間に読んでしまったのを覚えている。

しかし、読み終わったあとの私は、なんのこっちゃ神様なんかおらへんやん！という感情が胸に溢れ、どこにも出口のない怒りを、まだ蒼いが熱い躰に感じたものだ。そして沈黙は、本棚の中で忘れられてしまった。

夏休みが終わると、早速、学校で進路懇談が行われた。

そこで両親が進学はしませんと、担任や学年主任の前でハッキリいうのを聞き、私は大人達を傍観するに留まった。無言の両親と一緒に歩いた。三十分程のあいだ、誰も何も喋らなかったと記憶している。

夜ベッドに入ると、父よりも堂々と喋っていた母が、着慣れないスカートの裾を気にして椅子に腰掛けたのを思い出した。私は何に対して苛立っていたのだろう。

その時、私の目に本棚が映った。

女子校に行かせてもらっている私は恵まれているのだと、それまでは疑うこともなく両親に感謝をしていたのに、憧れている大学の受験挑戦や、学生生活を楽しみたいという浅はかではあるけれど、ささやかな淡い夢を両親に絶たれてしまったと感じた時、両親への怒りと今後の人生への焦りを感じたのだ。

そのあと沈黙を読み返し、遠藤周作はキリスト教信者なんやろなあとと思い、幼い日の日曜学校を思い出していた。幼馴染と一緒に日曜の朝、近くの教会へ出かけたんだ。だけど、なぜ私は日曜学校へ行くことになったのだろう。考えてみると、自分の意志ではなかったことに気づいた。

中学も、父親が奨めるお嬢さん学校というので受験した。

その日まで考えもしなかったことだったが、ピアノにお習字、英語にお絵かき、家庭教師に塾と、どの習い事をとっても一人っ子ということもあってなのか、かなり大きくなるまでの間、何もかも両親が準備してくれてたことに初めて気がついた。子育て中である私は、今、やっと、それらが両親なりの愛の形だったのだと解る。

しかし当時は、自分の身に起きていることが整理できず、上手く言葉にできないまま、ただただ両親を恨み、様々な感情を二人にぶつけるしかなかった。

そんな私にとって沈黙は、当時の私の中に渦巻く感情そのもので他人事ではなくなったのだ。主人公の焦燥感と安堵感、弱者と強者、真実と虚偽、善と悪、そして愛。若かりし日のこととはいえ、このころを振り返ると、身勝手な私は図体ばかりが大きく成長した、まるで幼児そのものだったと恥ずかしい限りである。

結局、家庭の経済的理由から進学を断念して働きだしたのだが、いつも何かを求めるような感覚があり、つまりは愛なのか答えなのか、正しい選択だったのかと自問自答しているところがある。かといって宗教に興味のない私は、何かの信徒になるつもりなんかはないのだけれど。

おそらく、善も悪もなく正しいも間違いもないのだと感ずるのだが、どんなに悩んでも、いろいろと思いを廻らせたとしても、結局は現実を受け入れていくしかないように思うこのごろだ。

しかし、その受け入れ方によって、明るくも暗くも、楽しくも悲しくもなるのだと思えるようになったのは、年齢のせいなのかもしれない。

人生のなかで悩まない人なんていないだろう。

しかし、どんな時代も、どんな国籍でも、どんな状況であっても、すべては愛に繋がっているから心配しないでいいよと、力強く云いたい。

ターニングポイント

<http://p.booklog.jp/book/46960>

著者：清瀬ちこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/marupyonlove/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46960>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46960>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.